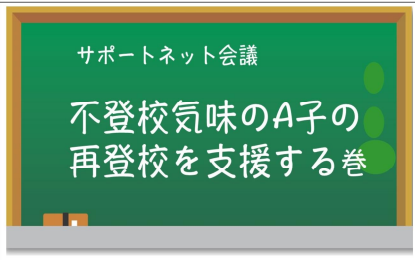


※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気がつきから使われはじめた言葉です。

# 学校教育課主催 不登校対策 サポートネット会議 拡充



## 1 市役所内での定例サポートネット会議

**現状・課題を共有**

「なんとなく行く気がない」「送ってもらったら行けるけど、学校内にしゃべれる友達はいない。」  
A子

「A子が学校に行くのは本人次第や」「学校に行くなら送迎するけど、めんどくさいのは權やで。」  
母

「学校ができることもあるでしょ!」  
A子

本人の思いと母親の意向、学校の支援方針が一致しない  
⇒B中学校で場所を変えて検討

## 2 B中学校内でのフィードバック会議

**現場の先生方との検討**

母への寄り添いは続けているが…  
なんとか、本人を支えたい!!

担任

登校し始めたことを先生に声かけられ、嬉しそう。好きなことはYouTubeを見ること。本人はEスポーツが好き。  
A子

再登校した時、「子のユーチューブ推しが学校に行くと聞いたから、から来るはずよ!」と予言。  
お母さん

## 3 B中学校内でのフィードバック会議

**対応策**：A子が得意なことや好きな話題に声掛けを続ける。  
2母親への情報、支持的な姿勢で臨む。特に、担任が孤立しないよう教育現場の体制づくりに必要。

**今後の課題**：A子が卒業した後の相談する人はだれかいないだろうか？  
学校に来るきっかけは、ユーチューバーだったはず、SNSのつながりが有効では!

インスタ、SNSで若者支援するレモネードづくりのゆうさちゃん

## 4 地域資源「開庁二時間前カフェ」へつながる

インスタやSNSで、「生きづらさを持つ若者を支える活動」をしている開庁二時間前カフェのスター7ゆうさちゃんと中学校の先生方が出会い、連絡先交換、本人へつながる。

先生がつなぎ役へ  
がんばる! A子

教育委員会学校教育課では、子どもが重度の社会的不適応に陥ることを防ぐために、市内の学校や関係機関がそれぞれの役割を果たしながら、学校不適応の子どもたちをサポートする会議を月に1回開催されています。

具体的には、月例での学校欠席者報告をもとに、効果的な早期対応や深刻化の防止、本人や家庭の孤立予防、ひきこもり予防、学校現場の支援につながる情報共有と協議を行っています。

令和5年度からは、地域共生社会推進課(以下、当課という)もサポート会議に参加し、個人、家族のアセスメントの他、学校以外の居場所の紹介、地域にあるつながりの提案や参加支援などもしています。

今回は、当課が関わる開庁二時間前カフェを紹介し、新たな出会いが生まれた事例を左の図で紹介いたします。  
(個人が特定されないようになっています。)



高島市 高島市 清水平室長

令和5年度2回目となる庁内連携会議は、全国的にも先駆的な取り組みを実践されている高島市よりくらし連携支援室 清水平室長をお招きし、研修、グループワーク方式にて開催しました。

高島市では、重層的支援体制整備を、高島市地域生活つむぎあいプロジェクトと名付けて、入口(相談支援)から出口(参加・地域支援)までの一体的な思考と、専門職同士の連携、相談支援事業所や民間企業との連携強化、官と民、弱みと強みを見える



高島市 つむぎあい会議の詳細

甲賀市からは(紙面左記に示す)サポートネット会議の実践として、学校教育課の松永先生が紹介されました。

解が得られるように、言葉の定義をしっかりと定め、イメージ化しやすい「つむぎあい」という言葉で連携を深める工夫を実践例をふまえながら、教示いただきました。

職種の共通理解 多部署・多

# 第2回庁内連携会議

## 重層的支援体制整備事業

10/18

# 懐かしい未来新聞

発行：甲賀市 地域共生社会推進課  
連絡先 内線1356  
0748-69-2155

本号の紙面  
★庁内連携会議報告  
★サポートネット会議  
★視察・全国共生サミットIN豊田  
★重層物語 シーズン4

## 庁内連携会議の役割は 連携と開発

○単独の部署では応えきれない問題があるから、**連携**する。そのために相互理解を促進する。他法他施策の知識を得る。連携促進方法を考える。  
○今の制度や仕組みで応えきれない問題があるから、**開発**する。そのために好事例を学ぶ。新しい施策・事業を生み出す。今ある仕組みを変える。

## 高島市のここを参考にしよう (参加者アンケートから)

連携の秘訣として「参加者にとってのメリットや効果を知らせることで、自分事として動いてもらうようになった。」が学びになった。

分野横断で俯瞰的に見られる職員と、中長期的な出口を辛抱強く待てる職員が必要だと感じた。

一つひとつの事例を大切にしながら、様々な市の課題を把握し、多部署・多職種・多団体が連携して複合的な課題解決と一緒に取り組んでいくシステムを構築していくことで、例えば、普段市民との接触が少ない課などでも、何かに引っかかることがあれば連携できると感じた。

地域(ムラ)ごとの特性に応じて活動されていること。

地域ごとに資源の活用方法を工夫されていること。縦割りでなく地域を丸ごとで、生活する人の視点で捉えておられた。

丁寧にコミュニケーションを重ねられている点。会議の持ち方など、工夫や細かいテクニックを駆使されたのだと思うが、人的資源をうまく繋ぎ合わせていた。



第2回庁内連携会議の様子

地域共生社会推進 全国サミットin豊田 10/12~10/13

第5回目となるサミットが、愛知県豊田市で行われ、市、社協等から複数名が参加しました。

サミットでは、地元市民だけではなく、全国から地域福祉やまちづくりを推進する福祉医療、行政関係者などが、有識者による講演会や交流を通じて、次世代を見守るべき地域共生社会の理解を深めるものでした。

2日間に渡る全国サミットでは、先駆的な取り組みをされている自治体職員や同志社大学の永田祐先生や厚労省の野崎伸一氏、湯浅誠氏等と直接お話をでき、大変有意義な視察となりました。

### 豊田サミットからの学び

- あらゆる住民が生きがいと役割、居場所を持つのが地域共生社会
- 福祉分野だけで考えず、まちづくり部局も一緒に地域生活課題に関わる、ごちゃ混ぜな視点
- 地域社会全員が当事者意識、他人事にならない
- 弱い人を助けるという発想ではなく、弱い人が強くなれる環境設定を考える

## うまくいき過ぎた重層物語 SEASON 4 - 1

今回は、『プレゼント』と題して重層物語をお届けします。地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。それでは登場人物の紹介です。

### 【登場人物】

#### ○相田律子…41歳

市役所職員。高齢福祉課の係長として、地域包括ケアシステムを担当し、地域共生社会の実現に向けた取り組みを進めています。7年前、自らの離婚と母親の介護が重なり、不本意ながら生まれ育った地に戻ってきました。母親は昨年に他界し、今は小学校2年生の娘と二人で暮らしています。

#### ○反町二郎…78歳

相田律子の隣に住む独居高齢者。妻に先立たれ、一人娘の恵子は結婚と同時に県外に住まいしています。半年ほど前から、同じ話を何度もするなど物忘れが出始めました。

#### ※地域包括ケアシステム

人口減少社会における介護需要の高まり対し、医療・介護などの専門職から地域住民の一人ひとりまで様々な人たちが力を合わせて対応していくとするシステム。

「地域共生社会だなんて、キレイごとよ」  
自治振興会向けに説明する資料をつくりながら、律子は溜息を漏らすように言った。

律子は最近うまくいかない。

律子にはリベリズムという個人主義的なところがあった。自らで選び取る人生を送ってきたという自負が人一倍にあった。幼少期の頃からその気配はあり、田舎特有の親密な付き合いを避け、権威主義的な父親の態度に反発し、家出するがごとく都心部にある大学へと進み、実家に戻らぬまま就労先を決めた。当時流行したインディペンデントな生き方に憧れ、効率的な成長に重きを置き、自立した女性に相応しいパートナーを選んだつもりだった。しかし、子どもができたのを境にして、家に居ることをそれとなく要求してくる夫とうまくいけなくなり、離婚を決めたのだ。

時を同じくして、実家の母親をいよいよ一人にはしておけない状況となり、走り続けた生活の小休止のつもりもあって、地元で市役所に就職した。市役所に勤めだしてからも周りの者に對して、「田舎離婚は新しい家族のカタチよ」「家の事が落ち着けば東京に帰るわ」などと話し、自らで築き上げた人生の後ろ向きな部分は見せないように振る舞った。

しかし、小休止の日々は、律子の想像したものとは遠く、ほととしくまういかなかった。その理由が、大きなビジネスチャンスを見つけたとき、そんなことなら格好も付くが、律子を悩ませていたのは、隣に住むただ一人の老人だった。

反町二郎には世話になった。玄関先で転んで骨折した頃から、年のわりに若いと言われた律子の母は、めつきりと老け込んだ。何をしても億劫がり、寝て過ごす時間が増えた。二郎は、日用品の買い出しや病院の送迎、家周りの草刈りなど、東京からすぐには戻れない律子に代わって、日常のあれこれを手伝った。その恩もあって、実家に帰ってきた律子は、得意でない近所付き合いを実践するよう努めた。その実践とは、自己主張しないとか、嫌な顔をしないといった類のもので、自立した女性に憧れていた日々の努力とは全く違うものだった。今となっては、自分の意に沿わない心がけなんかするもんじやないと悔やんでいた。

思い返せば、はつきりと二郎に言ってやればよかったと思う場面がいくつもある。娘の頭を土のついた手で撫でられた時、土産をぶら下げ家上がり込み装飾用のアンティークチェアに座られた時、畦道に咲く青く小さな花を娘と摘んでいると「それは大の草丸つちゅう花や」と教わった時……。

自分と娘との領域を少しずつ浸されるような暮らしに気分が滅入っていた。それに、近頃は二郎に物忘れが目立ち始め、要領の掴めぬことを話すことが増え、夜中に大きな独り言が聞こえることもあった。考え過ぎだとは思いつつも、娘に何かされないかと、二郎のことが少し怖く感じることもあった。

『地域共生社会とは、支え手、受け手という関係を超えてつながること、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をも創っていく社会です』

キーボードを打つ手を休め、意味を持たぬ文字の羅列を眺めながら、もう一度言った。

「やっぱり、キレイごとよ」

「何かあったんすか？」

社会福祉課の生駒主査が通りがけに問ってきたが、「ただの独り言」とそっけなく返事をした。この生駒主査は普段から「自分の身の回りから地域共生社会をはじめましょう」だなんて口にする男だから、隣の年寄りに気を病んでいるなんて知られたくなかったし、どんな口説きを受けようとも、地域共生社会を形骸化したものだとする気持ちには変化があるとは思えなかった。

それから数日後、律子と二郎の間で事件は起こった。

(作・中井 浩書)